

「……ふあーあ。朝か…。」

五人部屋の学生寮の二段ベッドの上から朝日の暖かさと眩しさを感じ、僕こと天城深夜^{あまぎしんや}17歳は目を覚ました。少し寝すぎたかと思ひ時計を見るとまだ朝の六時半ぐら이었다。僕はそんなに早起きなほうではないのだがまあ目が覚めてしまったのなら仕方ないと他のルームメイトを尻目にひとまず朝の散歩と洒落込むことにした。

「にしても食堂が開くまで後二十分かー。個人的には今すぐ飯食いたい気分なんだけどな…。」などと言っても食堂は開かないのでこうして外に出ようとしているわけなんだがな。それにしてもいい朝だ。早起きは三文の得というのはあながち嘘じゃなさそうだ。ここの施設は中々緑も豊富でというか周りをぐるっと山で囲んでる感じで建てられてるから豊富もへったくれないんだけどね。

さてさて、何故僕が学生寮にいたとか、ここはどこなんだとか、一体話のあらすじは何なんだコノヤローとか言われる頃だと思うのでこの天城深夜が簡単に説明いたします！

時は2×××年6月。人類は新たな時代に入った。100年程前に生体実験の結果新たに人類、新人類が誕生した。新人類は運動神経、知能に突出しており、普通の人間に比べ数倍の能力を誇る。

だが、これが引き金となり今世界は戦争やらテロやらで大賑わいのお祭り騒ぎで、ようするに荒れに荒れ放題というわけだ。しかも半世紀前には人類と新人類との間に大きな溝が

できてしまいい今では人類の手により新人類の数もかなり減ってしまった。ちなみに新人類と人類では人口の差が1000倍近くあり、人類側が数の差で圧殺という方法もあったが、もしそんな強引な手段を使っていたらたぶん人類のほうも半分は消えていただろう。それほど新人類は優れていた。

だが一人の発明家により人類は更に大きな力を得た。それは『妖精』と呼ばれる人工知能生命体である。こいつらは様々な形(文字通り妖精、人型、機械型などなんでもござれ)をしており、個々に能力を宿している。その能力は基本的には武器に付与することでその真価を発揮する。例えば火の特性を持った妖精を剣や銃にインストールすれば燃える剣や、炎を纏った銃弾の完成だ。とまあ大雑把ではあるがそんな感じだ。

そして僕がいるこの学校。いや、軍事学校はその妖精の扱いを研究、実用化している特殊な学校だ。ここにいる生徒は基本わけありだったりののだが、奇特にも望んで入学してくる奴もいる。ちなみに僕は前者であるが理由は言わない。しかもこの学校、人体実験もかなり行っていて毎年何百人も失敗で殺されたり、また精神崩壊などでいなくなる生徒もいるという最悪な環境だ。だが今はそういう時代ってことで僕は割り切っている。実際普通に暮らしていてもその町でテロが起きない可能性は決して低くはない。だからどこにいても同じだし、ここにいれば一応生きていく力はずっからね。まあ僕がここにいる理由はまた別だけださ。

といったも表向きは学校なのでそういった設備もきちんとしている。一応初等〜高等部まであり1学年200〜300人程度で一貫して普通科である。先程も述べたが全寮制で、男女に部屋が分けられており、一部屋で1〜6人ぐらいで部屋は割り当てられている。ちなみに部屋割には格差があり、一人部屋を獲得するにはかなり優秀な成績の人間だけが許されるのだ。まあ僕は平凡に4人部屋だけださ…。

敷地内では生活に必要な設備は一通り揃っているが、食事やそれ以外のものはこの施設の中限定の通貨を使用しなければならない。通貨はこの学校のもので、毎月決まった額を受け取るが、敷地内の施設でのアルバイトは自由でそれによって通貨の変動がある。

通貨の額は生徒それぞれに割り当てられた役職によって変わる。学校らしく名前には委員会がつく。生徒会やら風紀委員に図書委員。はたまた掃除委員なんてもいる。これに在籍しないと通貨が貰えない、また頑張らないと通貨が貰えないため皆真面目に取り組んでいる。

娯楽は多少あるがメディア系はかなり制限されており、学生はテレビ・ラジオ・インターネットの使用を禁止されており一部の新聞だけが施設の図書館に置いてあるぐらいだ。おまけに電話も禁止で携帯はあるのだがもはや妖精のゲージみたいになっている始末だ。どうやら外部に情報が漏れることを恐れている配慮らしい。これだけ聞くと学校というよりはほとんど監獄だ。アルカトラズ刑務所かよ全…。

だがこんな収容所みたいな学校でも一応部活動はある。もちろん外部との接触を禁止しているので甲子園やら花園は望めないが、結構種類は豊富で、中にはバクテリア研究部などと訳のわからないものである。彼ら曰く『バクテリアこそ世界最強だー!』などと日夜言っているらしい。なんのこっちゃ?

とまあこんなの他にもたくさんあり、細かいのまでいれたらとても両手じゃ足りないくらいだ。ある意味この学校唯一の娯楽なのかもしれない。

それとこの学校には新人類の学生もいる。前述に深い溝がと説いたが、一応両者の間で和平なるものが交わされ体面上は仲直りしている。だが、やはり新人類の立場は少し弱く多少の差別なんかもあったりする。特にこの学校(この場合研究所のほうかな?)は彼らを実験動物とみている節があり新人類の学生は頻繁に研究所のほうに連れて行かれる。そこで何を調査しているかは僕みたいな一般生徒は知る由もないのだが…

服装に関しては自由(私服は施設の購買で買う)だが授業に出るときは一般的な紺色のブレザーの制服がある。変なところだけ常識的な学校ぶるのだから意味が分からない。

校舎的なものは洋館仕立てで、初等〜高等まで一貫しているせいかかなり広く、たぶん一般的な大学よりも広いと思う。

そして何よりこの学校では妖精の実践的な使用の調査及び兵器としての活用を一番の目的としており、一人一体は所持している。まあ最近とある事件が起きているからこの統計は

ちよつと怪しいところだけだね。まずこの学校に入学すると同時に『携帯』という機械が渡される。これは主に電話をしたりするあの携帯ではなくいわば妖精などの入れ物としての道具だ。ちなみに、前述から出てきている携帯はこれの事だ。これにランダムに妖精が一体入っており、またある日突然携帯に現れたりするのだ。何で突然携帯に現れるのかは謎だが、そもそも妖精自体謎の多い物体なので深いところはわからない。これも多分研究やらそのあたりの実験の一環なのだろうけど実際のところは本当に謎だ。ちなみに施設側も生徒が何の妖精を持っているか、また生徒の妖精がどんな能力なのかは細かい事はわかっていないらしい。何とも適当な話だ。

他にもこの携帯は物も収納でき、重さで言うなら20キロまでなら基本いくらでも収納できる。ここの生徒は主に武器やらを入れて持ち運んでいる。いざというとき武器がないと妖精も使えないしね。

◇

「こんな感じかな?」

僕は一人呟いた。気が付いたらもう7時半を回っていた。折角早起きしたのにこのままでは朝食抜きにされてしまう。

「やばい、早くいかないと席埋まっちゃう」

僕は足早に食堂に向かった。

◇
食堂に着くと予想通り混雑し始めていたが席はまだ空いているようだった。僕は食券を買いに券売機に並んだ。さて今日の朝飯は何にしようかな？と考えながら通貨を入れいざ食券を買いおうとしたが…

「……はっ？」

券売機をみるとほとんど売り切れ、っていうかキムチ丼オンリーなんだけど…

「なんだこれは？どういった嫌がらせだ」

しかしよく見ると僕の後ろには誰も並んでおらず僕一人だけがこの券売機を利用していい。どうやら故障らしい。なんたる不幸。

「っていうか気付けよ僕…。はぁー、早起きは朝飯の損か…」

などと訳の分からないことを言う始末。それほど僕のショックはデカかった。

「今から並びなおしてたら席埋まりそうだしな…。仕方ない今日の朝食はキムチ三昧といくかな」

そう言っただけはあきらめてキムチ丼の食券（640円也）を購入し食堂のおばちゃんに手渡した。

「あんり？アンタもしかしてその券売機で買ったんけ？」

「いいえ、キムチが大好きなんです」

嘘をつきました。図星をつかれ恥ずかしいのでしょうもない嘘をつきました。

「そうかいじゃあ少しおまけしておいてあげよう」

やつちまった…。おばちゃんの写真が心に染みる。待ってくれおばちゃん実は僕はあまり辛い物が好きじゃないんだ！むしろ苦手なんだ！！

僕の願いは届かず山盛りのキムチ丼と共に小鉢までキムチにしてくれた。涙が出そうだった。僕は自分の愚かさをあらためて思い知った気がした。

「ま、いっかな。それよか早く席に着くかな」と

僕はあたりを見渡し3つぐらい空席がある場所を見つけそこに座ることにした。

「さてと、ではいただきます」

僕は目の前の強敵（キムチ丼）と格闘していると隣に誰かが座る気配がした。そう、ようやく彼女、不知火紅華。主役様の登場だった。

◇

私はいつも通りこの食堂の朝定食（焼鮭、サラダ、ごはん、味噌汁、漬物）を注文し、席を探していると知り合いの馬鹿が朝から奇天烈なものを食しているのを見て思わず隣に座り質問をした。

「貴様。いつからキムチ大好きキムチ君になったんだ？」

「勝手に変な名前を創作するな。これはアレだ、『キムチ健康法』ってやつを実践中なんだ」

「ほおー、そうかそいつは感心だ」

私が真面目に答えると此奴は怪訝そうな顔をし、なにやらブツブツ言ってから「ツッコめよ」などと訳の分からないことを言った。

「全く相変わらずのボケ殺しだな紅華……」

「ん？貴様今何かボケたのか？」

「……いや何でもないですタイ」

私は少し考えてからこう言った。「博多弁かい！」そうしたら奴は鳩が豆鉄砲くらったような顔をして口をパクパクさせたあと「……もういいです」といつてキムチ丼を一口食べた。



こいつは不知火紅華。俺と同じ年の17歳。赤髪で腰まである長髪に、気の強そうな吊り眼。一般的に見てかなりの美少女ではあるが、まあ今のやり取りを聞いていただいてわかるようにコイツは超^{スーパ}ボケ殺し人だ。わざとなのかそれとも本気なのか全く読めん。

だが、こいつは成績優秀、スポーツ万能の超人だ。おまけに生徒会長まで務める強者だ。もちろん俺と違い僚は個室のスペシャル待遇ときている。全く人がこんなキムチ丼なんか食ってるっていうのに……

「自分のミスを棚に上げるな馬鹿者が」

「……人の心を読むな。っていうか俺がキムチ丼食ってる理由知ってんじやねえか」

「フフ……軽いジョークだ」

こいつ嫌いだ。

「まあそんなことはさて置き、本題に入ろうか」

「ああ……。やっぱし用事があって来たのね」

「無論だ」

本当いい性格してるぜ。

「それで今回は一体どんなめんどくさい事件なんですか不知火生徒会長？」

「では朝の会議と行くか天城副会長殿」



「全く食堂で会議とは随分とだな」

「一石二鳥だろ」

「はいはい合理的ですね。んで、今回はどんなの？」

「うむ。実は最近施設内で妖精と生徒が行方不明になってるらしいのだ」

ああ、やっぱしそれかと僕は思った。そりゃ校内でもそれなりに噂になってるからむしろ知らないほうがおかしい。

「それで今回の依頼主は誰？」

「うむ。今回の依頼主は高等部三年生の氷河^{ひようがみそぎ}禊先輩だ」

「へえ、てつきり教職員からかと思つたら一般生徒からの依頼なんだ。それは驚きだ」

ちなみに何故俺が驚いているのかと言うと、この件は既に先月ぐらいから噂になってたから今更一般生徒から依頼が来るとは思えなかつたからだ。だからてつきり教職員か、研究員が重い腰をあげたのかと推測していた。

「ああ、ともかく我々とは言え、依頼がなければ動けないからな。ようやく来たかと待ち焦がれていたぐらいだ」

紅華は妙にワクワクしているようだったが俺は重労働および肉体労働はできるだけ避けたい所存だ。とはいっても生徒会としてちゃんと働かないと来月の通貨支給に響くのでやらざるをえないのだが…。

「まあ仕方ない。んで、なにかから始める？」

「とりあえず片っ端から怪しいやつを洗うことから始めよう。お前がな」

「へっ？もしかして僕一人でやるの？」

「当然だろう？」

コイツはさも当然のように言つてきやがつた。

何故？どうして？ホワイ？確かに僕は紅華の部下的な立ち位置だが、何故そんな重労働を僕一人でやらなければならないんだ!?『新人アナ初のリポート、ただし台風中継』みたいな!?

「…そのネタは色々なところからクレームが来るから控えろ」

「あつ！ごめんついつい混乱を…：つてだから人の心を読むなよ！」

「大体この采配になんの文句があるというのだ？」

いや、文句しか浮かんでこないんですけど…

「私が肉体労働で、貴様が頭脳労働。とてもわかりやすくて適切な判断だろう？」

「…わかつたよ。そうですとも、そうですとも。一言一句間違つておりませんよ。会長殿」

僕は渋々了承することにした。

「うむ。ではよろしく頼むぞ。我が下僕よ」

友達を下僕扱いかよ。ちくしょう誰かコイツを一回黙らせてくれ。

「という訳で私は朝食が済んだので先に行くとするぞ。お前も早く済まさないと授業に遅れるぞ。」

「ほえっ？」

僕は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。よく見ると紅華は朝食を綺麗に（鮭の骨まで）食べ終わっており、僕はというと会話に夢中でキムチ丼（キムチ小鉢付き）をまだ半分も食べ終わっていない状況だった。

「HRまで後十分だ。生徒会副会長として遅刻は許さんぞ」

そんなこと言つて紅華はさっさと行つてしまった。時刻は八時十八分。よくみると周りに

ほとんど人はおらず……っていうか僕たち以外いなかったりする。

「……早起きなんか二度としない」

僕はそんなことを胸に刻みながら急いでキムチ丼を平らげるのだった。



生徒会。正式名称『生徒会執行部』は一般学校みたいに演説をしたり、慈善活動をするものではなく、主に依頼に応じた校内の異常、もしくは事件などの究明および解決を受け持ついわば『警察機関』的なものだ。細かいこと（例えば物が盗まれた等）は風紀委員が適切なのだが、事件の幅が大きくなるとこうやって生徒会執行部が動くのだ。本来なら教職員、はたまた研究員からの依頼が普通なのだが、今回は何故か生徒のほうから依頼が来た。それほど今回の事件は大きなものなのだ。

元々妖精自体は電子生命体で意思を持って動くやつも少なくないので勝手にいなくなることもたまにだがあるのだが、それが数十件ぐらいに達せばそれは十分大事件だ。しかもここ一月でだ。今僕も調べものついでに得た情報だがこんなことは前代未聞のようだ。まあこんな怪しい施設だから何が起きても不思議ではないが藪をつついて蛇が出るじゃないが、あまり大きすぎる事件には関わりたくないものだ。

「とは言っても会長があの紅華じゃ無理かもな」

不知火紅華……。彼女は頭がかなりよく切れ者だ。が、どっちかっていうと頭脳作業は嫌

いで力づくに事を進める暴力主義者だ。そんでついたあだ名が『傷ついた紅い女王』スカーレットドクイーンってぐらいだからな……。

生徒会は敷地内で特別に生殺与奪の権限（ただし依頼があった時だけという制限付きだ）が与えられている。そんな権限が与えられているぐらいいかなり危険な役職だ。一歩判断を間違えれば自分達だって死にかねない。ちなみに紅華は基本容赦しない。ちなみに『紅い』のとは髪の色だけじゃなく『鮮血』って事からもその由来が来ている。

「まあ他にも理由があるんだけどね」

僕は咬いた。

こんなイカレた時代、イカレた施設だからこそ通る理論だ。こんな時代じゃなきゃアイツだったただの美少女だったかもしれないのに……。

「まあ、あの性格悪さじゃ『女王』の部分はとれないかもな」

僕は思わず苦笑した。こんな独り言紅華にでも聞かれたらただじゃ……

「悪かったな性格が悪くて」

ガタッ！

僕は思わず椅子から落ちそうになった。後ろには腕を組み両目を閉じて仁王立ちになっている紅華が悠然と立っていた。

「えっと、紅華さんいつからそちらに？」

「うむ。生徒会。正式名称『生徒会執行部』」ぐらいの下りからだ」
最初っからかよ！言えよ！そして気付けよ僕！！

「あー…、その怒ってらっしゃるかしら？」

「ん？何故だ？私が怒るはずではないか」

僕はそれを聞いて安心した。よかった、殴られると思った。

「それより天城ちよつとこつちに来い。プレゼントだ」

何だろう？と僕は思いちよつとワクワクしながら紅華に近寄った。

…殴られた。

「さて、では早速依頼主に挨拶に行くぞ」

「あー、了解です」

僕は頭を擦りながら紅華について行った。…怒ってないって言ったくせに。



「どうもお初目にかかりますお二人とも。僕は三年A組の水河禊です★」

「……………」

初対面の人間が語尾に『★』を付けた場合僕達はいったいどんな対応をしたほうがいいのか？
だろうか？

彼は水河禊。性別♂。真っ黒な黒髪に、真っ黒な瞳でしかも何故か黒い学ランなんか着て

て全体的にとってもダークネスな外見だが、表情はにこやかでとてもいい人そうだった。でも『★』はないと思う。

「っていうかA組ですか？」

「そう。A組だよ」

この学校ではA～Fまでクラスがあり、ここでも格差がありAが最高ランクとなっている。ちなみに僕はCクラス。中の中だ。

「へえー、A組の人にも被害があったなんて意外ですね」

「ふむ。私のクラスにも数名いたようだ」

A組までも被害に合うなんてこれはやはり一筋縄ではないかないうのだ。

「そうなんだよ。僕の大事な相棒まで被害に合って本当最悪だよ」

とか言いながら水河先輩は笑顔を崩さずに話している。うーん、掴みどころがなさそうなんだ。

「それで水河先輩。どうして自分の妖精がいなくなったか心当たりはありますか？」

一応紅華にも礼儀というものがあるらしく敬語を使用している。

「そうそう。それなんだよ。実は僕見たんだよ」

「何をですか？」

「犯人をだよ」



「……はっ？」

おいおい、いきなり事件解決か？まだ物語は始まったばかりだよ。

「では状況をお聞かせください氷河先輩」

「うん。いいよ。一昨日の夜僕が門限を無視して相棒と一緒に夜の散歩をしたんだ」

生徒会としては今の発言は厳罰ものだが今は突っ込まない。

「そうしたら突然何者かに襲われてそいつが僕を拘束している間に自分の妖精かな？に命令して僕の大事な相棒を一口で食べちゃったんだ」

「……………」

なんだろう？簡潔すぎてわからない。っていうかこの人やっぱり脳に異常でもあるのかな？

「…妖精が妖精を喰らう？そんな話は聞いた事ありませんな」

紅華の言うとおり妖精が妖精を喰らうなんて話は聞いた事も無い。そもそも電子生命同士なんだから結合してもまあおかしくはないが今のところそんな話は知らない。

「でも事実だしな…」

「では犯人の顔とか妖精の特徴とか何かわかりませんか？」

「そうだね…。犯人については全くわからないけど妖精の方は多分悪魔タイプだったと思うよ」

「ほお。悪魔タイプとはまた珍しいですね」

一応妖精って名前だが色んな形があり、中でも悪魔タイプと天使タイプは超レアもので、ランクA以下はないものもつばらの噂だ。

「うん。それだけは間違いないよ。あんな珍しいタイプは他には思い当たらないしね」

「そうですか。わかりました。とりあえず究明にむけて我々も動きます」

「じゃあよろしくね。紅華ちゃんに深夜ちゃん★」

…またそれかい。にしても自分の相棒がいなくなったのに何でこの人はこんなに爽やかにこやかにしていられるんだ？

「天城何をしている。早く調べに行くぞ」

「あいよー。りょーかいしやした」

まあ考えてもしようがないか。と僕たちは教室を後にした。



「ではまず情報収集から始めるぞ」

「前から言おうと思ったんだけどさ、ここネットとか禁止なんだよ？ あんまりやりすぎるとそのうちばれると思うんだけど…」

「うむ。大丈夫だ。その時はその時だ」

立派なお考えで…。

「まあいいや。ウルス出てこーい」

僕がそう言うのと携帯からロボット型の妖精が現れた。これが僕の相棒ウルスだ。この施設は外に繋がる電子機器は基本的に禁止されているのだが、こいつは携帯からでも色んなネットの世界に入り情報や隠ぺい等をしてくれるサポート専門の妖精だ。

「相変わらずお前の妖精はゴツゴツメカメカしい形だな」

「僕の大事な相棒に文句言うな。第一大きな声で言うなよ。こいつの細かい能力は内緒にしただからさ」

そう。こんな能力を大っぴらにしたら確実に取り上げられるからね。実はこいつの能力は厳密に言えば電気信号への干渉である。普段はこれで相手の脳波に干渉したりするだけと言っているのだが(つてかこっちの方がメイン)紅華がこんな使い方もありじゃないかと言ったのがきっかけで発覚した使い方だ。だからこの使い方は俺と紅華しから知らない。そもそも基本電子機器禁止なこの環境でこんなこと思いつくかね？生徒会長のくせに平気で校則破るなんて信じられない。

「うむ。破っているのはお前だから私に責任はない」

どうしようと僕を裏切りやがった。しかもまた人の心を読みやがって。っていうか今の確実に問題発言だ。

「まあいいけどさ。んじゃ初めますか」

そういつて僕はウルスを自分の携帯にインストールした。ウルスは学校のメインコンピュー

ターに形跡が残らないようアクセスしていく。

「んじやまずはここ最近妖精が行方不明になったって生徒をリストアップしますかね」

僕はウルスに被害者の名簿を探させた。

「ふむふむ……。おや？」

「ん？どうした」

「……いんや何でもない。なるほどなるほど。どうやらここ一か月での被害は約三十四人か」

「ほう。それはかなりの数があるな」

「ふーん。妖精が妖精を喰ったか……」

僕は先程会った氷河先輩の言葉を思い出す。

「あの人の言うことはどうも嘘くさいというか、信憑性にかけるというかなー」

まあそもそも前例がないのだから信憑性もくそもないかな。

とか言いながら他にもここ一か月の外出記録やら生徒及び研究員等の行動記録などブライベートもへったくれもあつたもんじやない事を調べまくった。

……1時間後……

「ほい、これリスト」

「早いな。さすが唯一の取り柄だ」

「……何気にひどいこと言っていないか」

「褒め言葉のつもりだが」

たぶん本当に褒め言葉のつもりだから困る。嫌味だとしてもむかつくが。

「とりあえずこの4人が今ところ怪しいかな？」

「ほうほう。ん？此奴は……」

「ああ、それなんだけど僕そいつのこともうちよつと調べるから紅華その3人^{……}とこ行くなら

一人で頼むよ」

「わかった。では引き続き頼むぞ」

「おう」



とりあえず私はいいつが怪しいと言ったことやつらに会って話を聞くことにした。

「にしても顔写真付きだから恐れ入る。あの短時間でここまで凝るとはな」

私には珍しく奴に関心を抱いた。

「さて一人目は……」

3年C組 ^{（このしにいぞう）} 殺死泰三 男。趣味・殺戮

「……いきなり濃いのがキター」

なんだこれ？本名か？そもそも趣味・殺戮ってもう確定か？いやいや安易すぎる。とりあえず話を聞いてからでも遅くはあるまい。

そう思いながら私は3年の教室に行きそやつに会いに向かった。

「あ……あの……ぼ、僕に何か……ようですか？」

「……………」

私は教室に着くなり泰三先輩を呼びつけどんな人物なのかと期待しながら待っていると、なんととも肉中背で、気の弱そうないかにもいじめられっこ風の奴が出てきた。

「……あの、貴方が殺死泰三先輩ですか？」

「は……はい、そうですが……」

「趣味が殺戮だそうで？」

聞いた瞬間何故貴女がそれを見たいな驚いた表情をしていた。しかもかなりオドオドしている。

「な……何故あなたがそれ!?ち……違うんです!あ……あの、あの僕ちよつといじめられっ子体質っていうかなんていうか、その、その……」

あまりにきょとり過ぎていてもはや会話不能に近かったが、まあようするに……

「つまりあのプロフィールは真っ赤な嘘だと」

泰三先輩はしゅんと項垂れた後「……そうです」と小さく呟いた。

「ちなみに一昨日の夜は何を？」

「部屋で寝ていましたけど？」

あいつわかってて資料渡したな。帰ったら殴る。

「では紛らわしいのでプロフィールの改善をして頂きます」

「はい、いいですねでした……。趣味の欄は今すぐ訂正に行きます」

「ん?待て。もしかしてアレは本名ですか？」

「本名ですよ」

名前は本当らしかった……

「全くあやつは……」

私は文句を言いつつ次の資料に目を通した。

1年B組 あまりぎやゆか 余木夜由香 女。趣味・綾取り。

「うむ。今度は真面そうだ」

私は思わず安心してしまった。といっても1年で容疑にあたるとは一体どんな人間か少し楽しみだった。

「うむ。……だな」

私は生徒に頼みその夜由香という子呼んできてもらうことにした。

……とてちて、とてちて

「なんですカーかいちょーさん？」

……天城、私にどうしろというんだ。

教室から出てきたのはどうみても小学四年生としか思えないほど小さい可愛い女の子だった。正直私と一つしか変わらないとは到底思えなかった。

「？」

夜由香ちゃんは物凄く不思議そうな顔で私を見ていた。私は思わず言葉を失ってしまった。いた。いかんいかん。来た以上調査はしなければ。

「う……うむ。ちょっと聞きたいことがあつてな」

「なんですカー？」

純粹無垢な顔をこちらに向けて夜由香ちゃんはこちらの表情を窺った。

「少し妖精を見せてはくれないか？」

「……いいですよ」

そう言うとき夜由香ちゃんは携帯を取り出し妖精を呼び出した。

「アラニード出てきてー」

携帯から出てきたのは毛深くて毒々しい……蜘蛛（多分タランチュラ）だった。美少女に蜘蛛……新手の萌ポイントなのか？

「かわいいでしょー。私の妖精」

たぶん一般的に見てタランチュラは可愛いとは言わないと思うのだが。

「そ……そうだな。うむ。可愛いな」

とりあえず話を合わせてみた。どうやらタイプは虫なようだ。悪魔タイプではない。

「この子ねー。糸とか吐けてとっても丈夫なの!!それでね、その糸で綾取りとかできるんだよー」

なるほど、だから趣味・綾取りか。

「そうか。それじゃ後少し携帯を見せてくれないか」

「うん!はいどうぞ」

満面の笑みで夜由香ちゃんは私に携帯を渡した。まあさつきのは例外だが一応調査だから調べておくか。

「ん？」

「どうしたんですか？」

「……いや何でもない。それよりここにあるゲーム機は一度没収だ。」

「んにゃ!？」

そういえばすっかり忘れてたといった顔をして項垂れてしまった。ちょっと可愛いな。

「では失礼した」

「……はい、です」

最後まで項垂れていた夜由香ちゃんだった。

「……ろくなのがないな」

あいつの資料大丈夫か？そろそろ不安になってきた。今まで容疑者候補。いじめられっ子と幼女。

：殴るから鬨るに刑罰変更。

これじゃあ3人目も不安でしょうがない。私は少し肩を落としてげんなりしながら3人目の人物の資料に目を通していく。

2年A組 終焉鎌鼬^{おわりかまいたち} 男。趣味・勉強

「ほお。これはまた真面目な奴が出てきたな」

言わなくてもわかるとも思うがこいつは私と同じクラスの奴だ。成績は私には劣るがいつもトップ5には入るかなり優等生だ。同じクラスといってもあまり話したことはなく、いつも本ばかり読んでいる変な奴だ。

「さてさて、こいつはどうか？」

私は教室の前でそんなことを考えながら扉を開けた。中には何人かの生徒が残っておりその中に終焉もいた。どうやら本を読んでいるようだった。私は彼の机に歩み寄り彼の前で立ち止まった。すると終焉は読んでいた本を閉じ顔を上げて私を見た。

「…何か用ですか不知火さん？」

「失礼する終焉鎌鼬同級生殿」

「堅苦しい呼び方だな」

「そうか？堅物そうな貴様にはびつたりではないか」

終焉は一瞬怪訝そうな顔をしてから「用がないなら帰ってくれ」と言った。むう。何故か不快にさせてしまったようだ。

「いやいや、そうつれないことを言うな。もちろん用があつて来たのだ」

「では早くしてくれ。僕は忙しいんだ」

本を片手に終焉は言った。

「そう急くな。ではまず妖精をみせてはくれないか？」

「何故です？」

「調査のためだ」

終焉は少し躊躇ったが私が引かない性格だということはわかっていたらしく渋々要求に応じた。

「…まあ多分例の噂の調査と言ったところでしょうか。いいでしょう。出てこいウルフ」

終焉がそう言うのと携帯から狼型の妖精が出てきた。

「ほう、それが貴様の妖精か」

「ええ、というより同じクラスなんだから知っていて欲しいのですよ」

終焉はため息交じりに言った。

「ちなみに能力は追跡・追尾つてところですか？僕は戦闘向きじゃないんで例の噂とは噛み

合わないと思うんですけど?」

「さてそう判断するのは私達だ。貴様はただ調査に協力していればよい」

「わかりましたよ。存分に調べて早く帰ってください」

そう言うとき終昴は携帯を取り出し私に渡した。私をそれを受け取り中の履歴を調べた。

「ほう、変わった本を読んでおるな」

「プライベートですよ」

「そう言うな。私は好きだぞ。この書物は」

終昴はそうですかと付け加え手に持っている本を読みだした。

「うむ。悪かった。返すぞ」

「どうも。で、僕は怪しいですか?」

「さあな?これから帰ってから洗いなおす」

「では、もうよろしいですか?」

「最後に一つ」

「なんですか?」

「一昨日外出はしたか?」

「…まあ調べはついていていようから正直言いましよう。出ましたよ。それがなにか?」

終昴は眉一つ動かさずに答えた。

「いや、今度反省文だ」

「わかりました。それはまた後日で」

「うむ。では失礼した」

私が振り返り立ち去ろうとした瞬間終昴が声をかけてきた。

「なんだ?反省文は不満か?」

「いえ、ちょっと質問です。貴女は妖精についてどう思いますか?」

随分と唐突な質問だった。私は少し驚いてしまった。

「貴女も知っているでしょうが妖精とは新人類との交戦時代にイギリスのジーン・マーシャルが開発したものです」

それぐらいはここにいる人間なら全員が知っている。むしろ教科書の冒頭部分にだって載っているぐらいだ。知らない方がおかしい。

「彼は生涯の多くを狂人として監禁され自らを『三万二千七十六個の並行世界に同時に存在している』と称し、実際にすべての世界に関する様々な記述を残している。そして妖精とは彼の言う並行世界のどこか一つの法則や可能性を一時的に現実化したものと考えられていますね。彼の死後、妖精は南極地下のマザーシステムによって自動生産されネットなどに流通されていると言われています。」

「やけに詳しいな」

「常識です。そして妖精は現実には存在しないものとされています。それを電子機器や物、情報と言ったものを媒介としてこの世に存在しています。故に様々な能力、固体、力、種類、性格、そして知性を持っています」

終昴は冷淡な口調で続けていく

「そう、彼らは意思があるのです。まさしく完璧な電子生命体としてこの世にいます。貴女はそれをどう思いますか？彼は一体何のために妖精を生み出し、作ったのでしょうか？兵器として？道具として？貴女はどう思いますか？」

彼は表情を変えずに私に問いかけてくる。成程なかなか面白いやつだ

「質問が多すぎるぞ終昴。全くレディーに対する質問とは思えんな。だが答えてやろう。答えは、『わからん』だ」

終昴はさらに醒めた表情になった。

「私には先の先人が何を考えていたのかはわからん。わかりたくもない。人の思想など思惑など知らぬに越したことはない。多分後悔するからな……」

「随分と冷たいお考えですね。まあちよつと聞いてみたかったですからお氣になさらずに」

そう言うとき終昴はまた手に持っていた本を広げそれに集中した。もう私には興味がなくなっていた。

「では、今度こそ失礼する」

私が踵を返して教室からでた。彼は一瞥もせず本を読み続けていた。



「ああ……仕事ってだりー」

僕こと天城深夜はようやく調べものも終了して今ようやく解放されたところだ。

全くあの生徒会長様はこれがばれたら大ごとだったつうの。その辺理解してんのかな？

「うむ。仕事熱心で何よりだな天城」

後ろを振り向くと紅華が腕を組みながら仁王立ちしていた。ていうか、だから居るなら言えつての。

「おかえり。どうだった調査の方は？」

「うむ。まずまずだ。とりあえず今夜あたり張り込むぞ」

「えっ？今夜？」

「そう、今夜だ」

おいおい、僕をこれ以上勤務させるとはコイツ俺を過労死させる気だな。しかも夜つてことは明日の授業はクソ怠いことこの上ないぞ。

「おい紅華！お前僕をなんだと思ってるんだ！！僕はお前の奴隷じゃないぞ」とは口が裂けても言えないので……

「…はい、わかりました」

「うむ。では2時に校舎付近にて待つておるぞ」

僕ってヘタレかな？

そう言つて紅華は踵を返して部屋から出ていこうとすると何かを思い出したように立ち止まった。

「そうだ天城。今日はよく頑張つてくれたな。プレゼントだちよつと来い」

僕は何だろうと思ひ少しワクワクしながら向かった

…まず足で首を絞めそのまま3回転。そのまま体を逆さにして僕の左足を取り、僕の体を半回転させ頭から落とすこの技（エアスピンドライバー）をまともにくらった。

「私に雑用をさせるとはいいい度胸だな」

「…だからつてエアマスターの必殺技を実践で使わなくてもよくないか？」

この技は絞め、投げ、関節技を同時にかけるので首も関節も、つてか体全部痛いです。これってもはや僕既に戦闘不能じゃね？

「では今夜待つておるからな」

そう言つて今度こそ紅華は部屋を出て行つた。

「…あのー、せめてこの体勢をどうにかしてつて下さい」

僕は筋肉ドライバーを受けたような形で小一時間過ぐすのであつた。



そして深夜2時。俺と紅華は校舎の裏に二人である人物が来るのを待つていた。

「あのー、そろそろ眠いんですけど」

「そうか。それは良いことだ。お前は正常な人間だ」

いや、そんなことで異常か正常か判断されても困るんだけど…。それにしても今夜果たして現れるのかな？

「なあ紅華。もし今夜現れなかったらどうすんだ」

「明日も張り込む」

勘弁してください。

「まあ概ね問題ない。多分奴は安心しきつてゐるはずだからな。今夜あたり出てくるだろう」
全く何を根拠にいつてるんだかね。

「そういえばお前眠くないのか？」

「私は寝るのが嫌いなんだ」

「何だそれ？何で嫌いなんだ？」

「それは秘密だ☆」

「……………」

この後殴られた。僕が何かしたか？！

「つていかさ、俺別に戦闘しないんだから紅華一人でもいいじゃん」

「むっ！貴様か弱い女の子を夜中こんなところ一人にさせる気か？」

「か弱いねー…」

生まれ変わって出直せ。まずか弱い奴は他人にエラスピンドライバーなんてかけねえよ。

「むっ！静かにしろ。どうやら私の勘は正しかったようだ」

「勘で動いてたのかよ」

校舎を見ると小さい人影がちよこちよと歩いているのが見えた。

でも本当に来たな。予想通り単純らしいな。ではそろそろ行きますかね。

「待っておったぞ。餘木夜由香 一年生」

彼女は一瞬ビクッと体を震わせ少し静止してからこちらに振り返った。

「あっ…アレ？どうしたんですか会長さん。外出時間はすぎますよー」

「私たちは仕事だ。それよりお前は何故ここにいる？」

「えつと…。ちよつとお散歩です」

「ほう。先程貴様も言ったであろう。外出時間は過ぎているぞ。まあそんな些細な校則はどうでもよい。実は昼間に貴様の携帯をチェックしたところ妙な履歴があつてな」

「……………」

「貴様携帯に妖精を何匹持っている？二体や三体ならまだしも二桁は多すぎるのではない

か？」

「…おかしいですね。履歴はちゃんと隠してははずなんですけどね」

確かに携帯は巧妙に隠されていたが、僕にかかれば造作もないことだ。でもウルスの能力はあくまで電気信号への関与なので電源がついていないと侵入できない。だから紅華が直接行って携帯の電源をつけてくれないと駄目なのだ。まあここは連係プレイってとこだな。

「…まあばれては仕方ありませんね」

そう言って夜由香ちゃんは一瞬で僕達と距離を取った。ざつと五メートルつてとこか？かなり身体能力は高いようだ。

「じゃあ生きて返すわけにはいきませぬね！」

彼女は腕を横一線に薙ぎ払った。すると僕と紅華の足がナイフで切られたように切れ目が入り血が噴き出した。

「ぐっ！」

「……………」

なんだ!?彼女は何をしたんだ？あそこから一歩も動かず僕はまだしも、紅華に傷を負わせただって!?

「実は夜由香、超能力者さんだったりするんですよー。まあ嘘ですけどね。キャハハ」

彼女はとても嬉しそうに笑った。まるで子供が玩具で遊んでいるような残酷で純粹な笑い

方だった。

「ほらほらー、ポーっとしてるとバラバラにしちゃいますよっと！」

「くっ…」

紅華は咄嗟に僕を突き飛ばし庇った。すると紅華の全身が一瞬で切り刻まれ血が噴き出した。

「紅華!？」

「…黙ってみておれ馬鹿者が。貴様は頭脳労働、私は肉体労働だといつも言ってるだろうが…」

確かに僕に戦闘能力はほとんどないけど…でも…

「貴様私が負けるかとも思っているのか？」

「……そうだな。わかった見てるよ」

紅華があまりに自信満々に言うので取り乱した自分が馬鹿みたいだった。そうだな。コイツが負けるなんてありえないか。

「なにいちやつてんですか？そんなに死にたいなら貴女から殺してあげますよ。スカーレットさん!!」

そう言うとき夜由香ちゃんは両手を振るった。すると彼女の周りの木や、建物が次々と切られた。だが、紅華はもうそこにはいなかった。僕という枷がなくなった紅華は既に夜由香ちゃんのすぐ横にいた。

「なっ!?!いつの間に!!」

「では少し大人しくしてもらどうぞ夜由香」

紅華が拳を握りしめ殴りかかる。

「まあ想定内ですけどね」

夜由香ちゃんは一歩も動かなかった。一歩どころか微動だにしなかった。なのに紅華はまるで見えないナイフで切られたようにさらに体中を切り刻まれたようになりそのまま彼女の目の前で膝をついた。

「どうですか？夜由香は強いのですよ」

そして彼女はまた腕を軽く振るいとどめをさそうとした。が、それより一瞬早く紅華は距離を取り彼女が攻撃したであろう場所から離れていた。

「はあはあ…」

「全く期待外れの的外れですね。何がスカーレットクイーンですか？笑わせますねーキヤハハ。もう全身ズタズタのボロボロじゃないですか。」

「…いい気になるな。貴様の手品のタネはもうわれているぞ」

「……ほお。じゃあなんですか？」

「これだろ？」

紅華は手を差し出した。だが、そこには何もなかった。否、何もないように視えた。



「へえー。よくわかりましたね。貴女が初めてですよこの蜘蛛糸を見破ったのは…」

「それは貴様の慢心だ夜由香。昼間に妖精を見せたのは失敗だったな」

「…ああ、それですか。確かに言われればそうですけど、あの特別のを出してもしそれが偽物だつてばれたら困りますからね。まあ今となつてはそれがマイナスだったつてことですね」

「ふん。綾取りとはよく言つたものだ。そんな可愛いものではないだろうに」

「そうですね。この糸自体はただの透明な糸です。それをアラニードを媒介にしてできたのがこの蜘蛛糸^{スレッド}です。これ本当に便利で、音もないし見え難い、おまけに総重量五百キロまで耐えられる優れモノなんですよ」

「なるほどな。派手に腕を振るつていたのは貴様の周りに糸を張り巡らせあたかも蜘蛛の巣のようにしていたわけか」

なるほどだから夜由香ちゃんは微動だにしくなくても殴りかかる紅華を撃退できたつてわけか。まさに蜘蛛の巣にかかった虫のように罠に掛かつたつてことか。

「ご名答です。さすが生徒会長ご優秀で、キャハハッ！でもだからなんですか？もう夜由香には誰も触れられない…。遊戯王風に言うならミラーフォース発動状態ですよ？」

「ふん。ならば買外しでも使えばよいことだ」

そう言うところ紅華は携帯を取り出し中から刃渡り三十センチぐらいのダガーナイフをとりだした。これが紅華の通常武器だ。

「はん！ナイフで糸を切ろうっていうんですか？甘いですよ。貴女は白い恋人ですか？そんなでこの蜘蛛糸スレッドを破れるとお思いですかあ。これは普通の曲弦師が使うワイヤーより切れる上に丈夫なんですよおー。そんなちょこざいナイフで切れるわけねえだろこの阿婆擦れがあ!!!」

「なに、誰も切るなどとは言わんさ。そもそもこんなもの切ろうとするなら斬鉄剣でも使いたいところだが生憎所持してなくてな」

「はん！じゃあそんなもので一体何を…」

「知らないのか？私が何故スカーレッドなのか？私のレッドはこういう意味だ！出ろコロナ!!!」

紅華が叫ぶと同時に携帯から一体の真紅の天使型の妖精が現れた。そうこの妖精こそが紅華の相棒・コロナだ。

「さあ、見せてやるぞ！私とコロナの戦闘をな。コロナをダガーナイフにインストール！」

するとコロナがナイフに吸い込まれるように入っていく、瞬間ナイフが真っ赤に輝いた。

「はん！それで燃やそうってでんすか。甘いです。ちんすこより甘いです！この糸は耐熱にだって余念はないです！」

「貴様こそ甘々だぞ夜由香。コロナとは太陽表面層の自由電子の散乱光のことだ。太陽表面の温度が六千度であるに對し、此奴は百万度以上の高温だ」

「なっ!?百万って…」

「つまりだ、貴様の耐熱どうこうとかそんなものは一切問題ではないということだ」

紅華は一步前に踏み出した。真っ赤に燃えるナイフを手を力強く夜由香ちゃんに向かって行く。

「くっ…来るな!!!!」

ヒュン！彼女は必死に腕を振り回し紅華に攻撃した。だが、もはや紅華は意に介さないようにナイフ振るい彼女の糸をことごとく焼き払った。

「そっ…そんな…」

「さて覚悟しろ夜由香。これで終わりだ！」

紅華は斜めに思いつきりナイフを振るった。するとナイフから炎が上がり彼女めがけて一直線に向かっていった。

「い……いやー……!!!!…なんつって★」

ボッ！！放たれた炎は寸分の狂いなく標的に向かって放たれた…はずだった。僕が見ると燃えているのは技を放ったはずの紅華だった。

「ああ、油断しましたね。慢心しましたね。私だってあなたのレッドの意味ぐらい知ってますよ。だから言ったじゃないですかミラーフォース発動って…。キャハハハッ！」

見ると彼女はコンパクトサイズの鏡を掲げていた。なんだ？一体今の一瞬で何があった!?

「そこのお供の方不思議そうですねー。タネをお教えいたしましょう。どうかあなた私が持っている妖精が一体じゃないって知ってましたよねえ!」

「そうだけ… まさか!」

いや、ありえないことじゃない。だが、まさかこんな短期間に、たった一ヶ月ぐらいで他人の妖精を扱いきることができるのか?

「それでも苦労したんですよこの子使うの。まあ一ヶ月じゃ一体、しかも単純な技ですけどこれしか習得できませんでした。まあこの子持ってた奴は超ザコで殺すのもめんどくさかったですけどね。キャハハッ!」

くっ! 予想以上の手練れだったようだな。本当にちよつと甘く見すぎたかも。

「ちなみに今のは鏡を媒介にした鏡の反射です。この鏡に妖精の魔法力を反射させ相手にそのまま返すとっても便利な技なんですよー」

ん? 魔法力だけだって。今魔法力だけって言ったか?

「質問だけど、魔法力をそのまま反射させるだけなのかな?」

「そうですね。それが何か? 貴方ごときがそれを知っても何の意味もないですよ。この子を使わなくても蜘蛛糸で充分ですよ」

「……そうか、魔法力での炎なら安心したよ」

「はあ!? この後に及んで何を言って…ッ!!」

何? 腕が熱い…。一体何が…

「えっ? このナイフは…」

「ふん。全く小賢しい真似をしてくれるもんだな」

夜由香が見ると腕に紅華が使っていたナイフが刺さっていた。そして燃え盛る業火をまるで意に介さないかのように紅華は悠然と立ち上がっていた。

「なっ…何で? どうして効かないの? 何で燃えないの!? だってそれ百万度以上ある熱量なんでしょ? なのに何で!」

さすがの彼女も演技ではなく動揺を隠しきれないようだった。そりやそうだ。何故紅華が紅蓮の炎で燃えているのにも関わらず悠然と平然と堂々と歩いていられるのかを知っているのは僕と紅華だけだからだ。

「悪いな、これは昔からの特異体質でな。私は魔法力による炎は一切効かないんだ。例えばそれが百万度でも一億度でも同じことだ」

「はっ? 何それ…。特異体質? 魔法力でもなく体質…。馬鹿げてる…聞いてないよ…。そんなの私聞いてないよ!? この化け物!!!」

紅華は一瞬不快そうな顔をしてそれから悲痛な声で言った。

「ああ、そうだ。私は

―化け物―

だよ」

刹那、紅華は思いつき前に跳躍し、夜由香ちゃんの正面に詰め寄り思いつき顔面を殴りつけた。

「ひぎっ！」

そのまま彼女は後方に吹っ飛び校舎に激突し気絶した。

「ふう。全くさ、効いてないならもっと早く動けよ。ちよつと焦ったじゃないか」

「うむ。これも作戦だ。後お前の驚いた顔を見たくてな」

ちつ、そんな余裕まであったのかよ。慌てた自分がちよつと恥ずかしいじゃないか。

「まあひとまずこれで一つ目の仕事が付いたな」

…ああ、そうだった。まだもう一つあったんだっけか。すっかり忘れてたよ。全くこれらが本番だっていうのに前座がこれじゃメインはどうなることやらな。

「さてと…」

そういうと紅華は夜由香ちゃんの腕に刺さっているナイフ抜いた。抜くと腕から血がドクドクと流れ出ていたので早く済ませて医務室に運ばないとな。

「こそこそ隠れてないでそろそろ出てきてください。氷河禊先輩」



すると校舎の陰から一人の人影が出てきた。

そう、今回の依頼主氷河禊、その人だ。

「アレ？ばれてた？」

おどけた表情で彼は言った。

「ええ。最初っからですよ。貴方の話を聞きに行った時からずっとですよ」

「ありやいや、そんな時からばれてたんだ。じゃあ何で態々僕の依頼なんか受けたんだい？」

「貴方に近づくためですよ先輩。そもそも貴方誰なんですか？この施設のどこにも氷河禊なんて名前の人物いませんよ」

正確にはいるんだけどいいない。確かに名簿にはいるけどそれはあくまでいるだけだ。実際にはそんな人物存在しない。僕たちは半月前からこの人物に辿り着いていたがまるで幻のような存在で名前以外全く情報がなかったぐらいだ。ある日進展がないままどうしようかと悩んでいると紅華に彼からの依頼があったと聞いて心底驚いたけどね。

「というか貴方それすらも知っててなお僕たちに依頼してきましたよね？」

「あらら、それもばれてんだ。さすが副会長★」

もう突っ込まない。

「何故ですか？何故貴方は今更僕たちの前に姿を現したんですか？」

「うーんとね、そりや当然彼女：不知火紅華に用があるからさ」

「ほお。私が目的。デートのお誘いならお断りだぞ」

「それは残念だね。それも一つだけど…」

それも理由の一つかよ。本当に読めないし食えない人だ。

「とりあえずお一つ手合せ願いたいんだけどどうかな？」

ゾクッ！

瞬間空気が凍りついた。なんだこの殺気というか悪意は!? これはあの氷河先輩？ さっきまでは段違いの冷たい迫力だ。彼の真っ黒な瞳、真っ黒な髪、真っ黒な学ランに、そして真っ黒なオーラ…。これがこの事件の黒幕・氷河禊か…。

「そうか…」

すると紅華は有無も言わず超スピードで氷河の前に現れそのまま組み伏せナイフをのど元に突き付けた。

「うっわ…。容赦ねえ」

「ふん。そもそもこっちはお前みたいな謎の人物ととともに戦いあう気はない」

「おいおい、主人公のくせに姑息だね」

「質問に答えろ。貴様はなんだ？ 何のために妖精を集めさせていた」

「えつとね…、やだ。教えない」

ズバッ

紅華は容赦なく氷河の頸動脈を断ち切った。…おいおいもうちよつと粘れよ。本当に容赦ないな。これじゃ何も聞き出せ…

「だがその冷淡さ嫌いじゃないぜ」

「!!」

紅華が後ろを振り向くとそこには紅華を指さし見事にいい顔した氷河が立っていた。

「…貴様今何をした？ 私は確かに貴様を組み伏せ頸動脈を断ち切ったはずだが…」

「さあ？ 見間違いないじゃない？」

「ふざけるな!!」

紅華はもう一度氷河に切り付け、コロナの力で超高熱となったナイフは切った先から燃えだしていた。

「…今度こそ」

「うんうん。頑張ってるね。」

「なっ！」

氷河はまたも紅華の背後に悠然と立っていた。

なんだ？ 何をしたんだ!?

「不思議そうな顔をしてるね。いいよ別に隠すことじゃないし教えてあげるよ。まあ平たく

言えば僕の能力は相手の認識をずらす嘘の虚影フエイクシャドってやつさ」

「認識…をずらす？」

なるほど、だからそこにいたはずなのにいなかったのか…。でもなぜ態々そんなことばらすんだ？言ってしまうはこの能力は相手の虚をついてこそその真価を発揮しそうな能力なのに何でだ？何よりさつきから紅華に攻撃するチャンスがありながらそれをしないのは何故だ？どうみても遊んでいるようにしか見えない。

「貴様ふざけているのか？そんなものタネが割れてしまえばどうということなどないぞ」

「いいね、その啖呵。じゃあやってみせてよ」

「ふん。後悔するなよ！」

紅華はナイフを振るいそこから高熱の炎を斬撃状に繰り出し、氷河にヒットした。が、またもそれは氷河をすり抜け奴はそのすぐ隣にいた。

「あれあれ、どうしたのかな？また外れだよ」

「…せいぜい笑っている。ハッ！」

紅華はナイフを正面に突出しその先端から小さな炎の塊が幾千も生み出されていく。

「いくら認識をずらしたところでこの無数の炎弾は避けられまい。散れ！」

叫んだ瞬間炎の弾は紅華の正面を中心に四方八方に飛び散った。これならいくらなんでも

：

「後ろ以外は完璧な攻撃だね」

「！」

紅華は反射的に真後ろを切り付けた。が、またもそれはすり抜けた。

「貴様…、どこまで小癪な」

「ははっ。僕は嘔吐きだからね。」

それから紅華は何度も何度も氷河に向かって攻撃を繰り返したが、それはすべて空振りで文字通り遊ばれていた。こんな紅華初めて見た…。やばい、こいつ強い…。

「ハアハア…」

「なんだよー。もうばてちゃったの？ちよつとガッカリだよ。赤色・がこんな程度だったなんてさ」

「…そうか。ならばもう終わりにしようか」

「えっ？」

フエイクシャド

「貴様の嘘の虚影の効果範囲は約五メートルだろ？」

「…へえー。成程、無闇に攻撃してたってわけじゃないんだね。でもそれがどうしたの？それがわかったところで…」

「いや、そうでもないさ」

ザクッ！

紅華はナイフを思いっきり地面に突き刺した。

「囲め…。炎上壁！」
ファイアーウォール

その瞬間ナイフが真っ赤に光、ナイフを中心に炎の壁が氷河と紅華を囲んだ。

「なっ！？」

「…どうだこれで逃げ場はないぞ。貴様を中心に直径十メートルを囲ませてもらった。これで嘘の虚影も無意味だ」
フェイクシヤド

「……こんな技があるなら最初から囲うこともできたはずだね。なんで使わなかったの？」
「はん。私は主人公だぞ？多少ピンチを演出するのは務めた。さてそろそろ燃えて…！」

紅華はとどめを刺そうと氷河を見ると、氷河は両膝をつきボロボロと泣き崩れていた。

「い…嫌だよ…。死にたくないよ……。ねえ…お願いだから殺さないで……。僕…死にたくないよ………」

「…因果応報だ。貴様だって夜由香を使って生徒達を殺しただろう。その報いだ」

「だって…アレは……あの子が勝手に……」

「同じだ。貴様がどうやって言いくるめたかは知らん。だが貴様が黒幕である以上ボスが責任を取るのは当然だろう。もう貴様の戯言は聞き飽きた。焼き尽くせコロナ」

紅華はナイフをもう一度地面に突き刺した。すると炎の中は炎で満たされた。

「…うわあ。派手に燃やしてんなアイツ。これ大災害だぞ」

外側から見ると真四角にその場所だけがきれいに燃えている奇妙な図になっていた。

「まあアイツ事態に火は効かないから大丈夫だろうけどさ。こりゃ相手も気の毒だな」

しばらくすると炎は消え黒い煙だけが残った。するとそこから人影らしきものが立っていた。

そこにはボロボロの紅華とその額を鷲掴みにしている氷河禿、そして禍々しい姿をした悪魔型の妖精が立っていた。



「なっ！紅華!!」

「やれやれ、まさか覚醒前でここまでとは計算外だったよ」

氷河はため息交じりに言った。

「全く覚醒前にこの眼を使う羽目になるとはね。恐れ入ったよ」

見ると氷河の眼にはまるでブラックライトを当てたかのような漆黒の六芒星のような形が瞳に薄らと浮かんでいた。

「な…なんだそれ？お前一体何をしたんだ!？」

「不思議に思わなかった？僕が何故自分の能力を明かしたのか、何故媒介も無しに能力が使えたかをさ」

確かにどれも不自然だった…。だがそれがこの状況と何が関係してるんだ？

「まず一つ、認識をすらす嘘の虚影：アレ本当は嘘なんだ。僕とルシフェルの能力は食欲
ツクホール
なる闇…、エネルギー吸収さ」

えっ？エネルギー吸収って…。なんだそれ聞いた事も無い。それに僕とルシフェルってどう
いう意味だ？

「それとも一つ、媒介はね、実は僕自身なんだ。その証がこの黒い六芒星の瞳さ」
「なっ何言ってんだ！人間を媒介になんて聞いた事…」

「それが僕達新人類だけに許された…いや、その新人類すらも超えた魔眼保持者さ」

「…新人類を超えた魔眼保持者だって？」

「そう、魔眼は碧、赤、闇、光の四大属性からなる世界に四人だけの存在…。作られた天才さ」
いや、化け物か、と氷河は自嘲気味に苦笑した。

「因みに僕は闇属性。僕の力と、ルシフェルの使徒^{デスイター}喰い…、合わせて初めて食欲なる闇にな
るのさ」

作られた天才…魔眼保持者…。それじゃあまるで紅華と同じじゃないか！

「そう。そうだよ。君の考えている通り彼女も魔眼保持者さ。そのために僕はここに来た。
彼女の…おそらく赤の力を喰いにね」

だが、と。氷河は付け足した。

「それは覚醒してないと意味がないんだ。だから極限まで追い詰めたつもりんだけどまだ

足りないのかな？」

「…貴様大人しくしていれば好き勝手言いおって」

「あれ？まだ意識が有ったの？ちょっと驚き。まあ気絶してたら起こそうと思ってたからちよ
うどいいかな」

「…殺してやる」

「おいおい、怖いな。同じ新人類魔眼保持者どうし仲良くしようぜ」

「…貴様と仲良くするなら死んだ方がましだ」

「まあどうせ君は喰らうから心配しなくても君は死ぬるよ。でも、一つちょっと質問。君は
なんで新人類が生まれたんだと思う？」

「…はっ！何だそれは？」

「僕たちは人類によって作られた。でもそれを滅ぼしたのも人類…。意味が分からない。じゃあ何故僕たちは生まれたんだろうね？僕たちに至ってはもはや人でもなけりや新人類でもない…化け物、兵器、道具、殺戮人形。僕は色々と言われてきた。自分はただのモルモット…実験動物でしかない。多分意味なんかないんだよね。この世界には何の意味もないようにさ。無価値で無意味で無関係なこの世界…いつ壊してしまった方がいいんだよ。それが僕たちが生まれてきた意味。唯一の存在意義なんだと思う。君はどう思う不知火紅華さん？」
「……………」

紅華は沈黙した。否、何か考えて入れるようだった。少しの静寂の後紅華はこう答えた。「…はあ、今日はまたこんな質問ばかりだ。奴にもこう答えたが私の答えはやはり『わからない』だ」

一度区切って紅華は語り始めた。

「確かに私はお前の言うとおり新人類だ。全くよく調べたものだ。このことはその馬鹿と一部の研究員しか知らないんだがな。まあ知っている人間がいれば自ずと漏れるものだということか。話が少し逸れたな。わからないとはそのままの意味だ。そんなものわかるわけがないだろう？ 貴様も大概理想主義者だな。どうしたら自分をそんなに過大評価できるんだ？ 世界を壊す？ 馬鹿馬鹿しい…そんなことただ一人のたかだか生物がどうこうできる問題ではなからうに。いいか、存在意義だの理由だの私達なんぞちっぽけな存在が理解することなど烏鵲がましくはないか？ それこそ世界を壊し、破壊し、終わらせるなど神にも無理だ。できるならもうとつくにこの世は壊れている。確かに世界は狂っているかもしれない、が。だがそれがどうした？ 私は今幸せだぞ。私は化け物だ、兵器だ、道具だ、殺戮人形だ。でも私には仲間がいる。そんな私を見捨てない馬鹿がいる。私にはそれで十分だ。もし存在意義があるとなれば私は多分それだと思う。それが答えだ氷河禊」

彼女は苦しそうに言った。でも表情はとて誇らしく見えた。多分彼女はこの学園で誰よりも痛みのわかる奴だ。他人が傷つくのも、自分のせいで傷つくのも嫌いだ。だから自分だ

け傷つく。全てを犠牲にして。だから彼女はまだ誰も殺していない。どんなに容赦なくボコボコにしようとか彼女は決して殺したりしない。甘いのだ。自分以外にとて甘いのだ。だから自分は傷つける。際限なく傷つける。故に傷ついた紅い女王…彼女がそう言われる由縁だ。「……ふうん。成程ね。やっぱり個人で意見は違うものだね。まあいいや、ありがとうそろそろ終わりしよう…とやりたいところだけど、君まだ覚醒したことないね。」

「ああ、無い。そもそも私はそういう風に作られたものだとか知った」

「覚醒には条件があるんだけど、一番簡単なのが精神の崩壊かな？ お説え向きにちようどい人物がそこにいるしね」

「…待て、何をする気だ!？」

「簡単だよ。君の幸せを破壊しに行くんだよ」

「やめろ！ 奴は関係ない!!」

「おいおい、大事なお友達を関係ないとか言うなよ可哀想だろ。でももう無理だよ。僕を知ってしまったからには生きて返すわけにはいかないしね。せいぜい利用させてもらうよ」

そういうと氷河は紅華を掴んでいた手を放したが、紅華はそのまま空中に静止したままぶら下がっていた。

「…なんだこれは!？」

「ああ、そうそう。言い忘れたけど僕の力は喰らった精霊の能力を媒介なしに使えるんだ。

際限なく無限に食欲にね。混ぜることだってできる」

故に食欲なる闇^{ブラックホール}さ。と、氷河は付け加えた。

「さて大人しくしててよ天城君。ちなみに君の能力は調べ済みだけど、それは僕には効かないから安心して」

「…だろ。あんなみたいな異常変態人物の電気信号なんて触れたくもない」

「じゃあまず足からね」

そう言つて氷河は俺の両足を折った。

「グアッ！」

ボキッと鈍い嫌な音が響いた。くそっ！何をされたのかもわかんねえ！

「これで逃げられないね。じゃあ次はとりあえずアバラ骨一本ずつ外してくかな」

氷河は天城の胸に手を当てた。すると氷河の手が天城の体内にズズッと音を立てて入っていった。

「なっ!？」

「じゃあこのまま一本ずつ直接君のアバラを外していつてあげるからいい声で鳴いてね」

「やめろ氷河!!」

紅華は身動きが取れないまま氷河に向かって叫んだ。

「じゃあ早く覚醒してよ。そうしたらやめてあげる」

「グッ…」

言つてる間に氷河は天城のアバラを二本外した。

「大丈夫だよ。アバラ骨つて左右合計二十四本もあるからまだ後二十二本あるからもつと鳴いてよ」

一本、二本、三本…氷河は一本ずつ丁寧に外していく。それは地獄の拷問にも似た痛みだった。天城は…それでも声を出さなかった。

「…理解できないね。痛くないの？ひよつとしてマゾ？」

「…そうかもな。さつきから痛すぎて意識飛びそうだよ」

「じゃあ早く鳴けよ、泣けよ、哭けよ。お前の役目はそれだけだよ」

「嫌だね」

天城は一言だけそう言った。

「僕は決めたんだ。アイツが苦しむような真似は絶対にしないって。これ以上アイツを傷つけたくないんだよ」

「綺麗ごとかい？三流の決め台詞だね」

「そんなんじゃないよ。でも僕は…僕だけはアイツを傷つけない。そう決めたんだよ。例えば死んでも僕はそれだけを守る。それにアンタの思い通りになるのも癪だしね」

「……そうかい。じゃあ目障りださつさと死んで」

声が聞こえた。この消滅と拒絶の中に、その中に声が一つ響いた。

彼は彼女の正面に堂々と立っていた。折れた足の痛みを堪え、外れたアバラの苦しみも無視し、彼はそこに立っていた。

『…何故ここまで来れた？消飛んでもおかしくないはずだよ』

「だから言ってるんだろ。お前には無理だって。甘々のお前に世界どこか人ひとり殺せるかってんだ」

声の主は淡々と言った。何故だ？死ぬのが消えるのが怖くないのか？

『理解できぬ。私は化け物だ、兵器だ。そんな私が怖くないのか？』

「ないね。確かにお前は僕を散々こき使った拳句殴る蹴る絞めるの三段コンボを決めてくる最低な奴だ。だけどな、そんなお前が僕は好きだよ」

『…戯言を…。何も知らないくせに。私がどれだけ傷ついているかも、どれだけこの世界を恨んでいるかも知らないくせに…』

「ああ、知らない。でもさ、もしお前が本気なら僕はとくに消えてるさ。だけどここに存在している。何故だ？簡単だ。お前にはそんなことできない。僕を消すことなんてできない。それがお前の甘さだ、優しさだ。散々傷ついて憎んでも、それでも人ひとり殺せないお前が化け物の訳ないだろう？」

『…貴様がどんな風に私を思っているが知らないが、どんなに否定したところで私がしたこ

とは変わらない。今まで私のせいでたくさんの方が犠牲になり、たくさんの方が潰えた…。私はこの世に存在してはならないんだ。だから…』

「世界も消して自分も死ぬってか？…全くさっきからネガティブな発言ばかりやがって…。仮にそうだとしてもさ、それでお前が死ぬ理由になるのか？理屈ばっかこねるな。生きるのに資格も理由もいらない。そんな屁理屈で僕はお前を諦めたりなんかしてやらない」

『……馬鹿だなお前は』

「よく言われるよ」

『何故そこまで私を信じられる？私は全てを終わらせるために生まれたようなものだ…。そんな私が何故世界を消せないと断言できるんだ？』

「だからさっきから言ってるだろ。甘ちゃんのお前にそんなことできないって。大丈夫だよお前はまだ遅くない、手遅れじゃない。僕と違って手遅れじゃないから…。だから自分をそんなに無碍にするなよ。寂しいじゃんかよ。僕はお前とまだ一緒に生徒会やっていたい…。それが理由じゃ駄目か？」

『……』

消滅が消えた。彼女の瞳から白色の六芒星が消えた。その瞬間周りの拒絶の紋章も消えた。

「…はあー。お前にはつくづく呆れさせられる」

「どうも。お前にはヒヤヒヤされるよ」

「よく言われる。：すまなかった」

「いいよ。いつものことさ」

「いや、本当にすまなかった…。私は怖かったのだ。自分が化け物であることに…。昔私のせいでたくさんの方の命が尽きた。小さいものから大きなものまで…。私に関わったものが壊れた…。だから私は臆病になってしまったんだ。何かを失うことに、何かを壊されることにな…。だからお前が殺されそうになったとき私は委ねたんだ。全てを力のままに、成すがままに全てを…。だが、そんな拒絶の中お前の声が聞こえたんだ。実はあの時半分正気に戻っていたんだ。それでも私の中の黒い…。いや、真っ白な声には逆らえなかった。：貴様のおかげだ。礼を言う」

「：いいんだよ。お前は僕とは違う。それに最後に決めたのはお前だ。お前がこの世界を本当に恨んでいたなら僕が居たところで何も変わっちゃいないよ。だからこれはお前の意思だ。それは誇っていいんだぞ」

「：うむ。そうか。」

紅華は少し微笑んだ。そういえば此奴が笑ったとこなんて初めて見たな…。

「ところで貴様さつきから『自分は手遅れだ』などと言っているが何故だ？」

「それは秘密だ☆」

「キモイ」

バツサリ切られた。ちょっと傷つく…。

「うむ。まあよい。そうだ。ちょっと来い天城」

「：また殴るの？」

「大丈夫だ。私がそんなことするわけないだろう？」

僕はホッと胸を撫で下ろした。

ワクワクしながら近寄った。

キスされた。

「：なっ、何してんだよお前!!？」

「うむ。では行くぞ。天城副会長」

「ってちょっと待てよ！この穴だらけの地面やら半壊の校舎はどうすんだよ!？」

もちろん紅華が消したものは元に戻ってはいない。地面は抉られ、校舎は半壊、おまけに外壁に至っては跡形もない。

「うむ。私はどうやら消す力はあるけど治す力はないようだ」

冷静に言うなコノヤロー！これはいくらなんでもやばいって！ってかこの騒ぎでなんで誰も来ないの？皆お寝坊さんなの？

「うむ。その突っ込みはいかなるものか甚だ疑問だな」

「うるさい！こんな時に突っ込みもクソも：だから人の心読みなよ!!ああもうめんどくさ

い!!!」

「テンションが高くて何よりだ。では帰って寝るぞ」

「待てよ！本当に？本当に帰っちゃうの？これほんとにいいの？ってかお前主人公だろ？主人公が一番被害大きくしていいのよ！」

「うむ。どうやら私は主人公ではなくラスボス：ゾーマ的な存在だったらしいな」

勇者が一転大魔王って、どんなRPGだよ……

「大丈夫だ。生徒会にその手の行為は免除という規定もある」

「いや限度つてもんがあるだろう！ってか今回依頼失敗しろ！あいつ逃げちゃったし！」

「なんだアイツ逃がしたのか？役立たずめ」

コイツ絶対に感謝してない。僕は切実に思った。

「まあ仕方がない。出直した。今度こそ捕まえて私の前に土下座させてやる」

ああ、一応怒ってんのね。そりやそうか。今回こうなったのも全部アイツのせい……。アレ？なんだろうそう思ったら腹立ってきた……。ってかあちこち痛ツ……

「だあー！忘れてた!!僕今全身バッキバキだったんだ!!!!あちこち痛い!!!」

「ほお、痛みを忘れるとは貴様とうとう痛覚まで馬鹿になったか。うむ。さすがだ」

何がさすがなのかわからない。うー……意識したら余計に痛い。さすがに歩くのは無理っばいな。よくこんな状況で歩けたもんだ。

「……仕方ない。ホレ」

紅華は屈んで手招きした。

「背負ってやる。医務室まで連れ行つてやる」

「……………」

かっこ悪い……。正直かっこ悪い。散々かっこつけといて最終的には女の子に背負われ退場なんて……

「早くしろ。それとも嫌か?」

「……はい。今行きます」

僕は仕方なく。紅華に背負ってもらい、そのまま医務室に向かった。

「ぬっ。貴様軽いな。やはりキムチばかり食べているから栄養が足りないのか?」

「……冒頭の下りを引っ張るな。台無しだ……」

◇

「やれやれ、とんだ災難だったよ。どういふことだい終焉?彼女赤じゃなかったじゃないか」
腰に手をあて氷河が怒ったポーズをした。左腕がないので少し変な感じだった。

「別に僕は赤なんて一言も言っていないぞ襦。僕はただ彼女が魔眼保持者だと言っただけだ」

「アレ?そうだっけ?でも白色が完成してるなんて聞いてないよ」

「……それに関しては僕も同感だ。全くあの人は何を考えてるんだかな」

「あの爺本当適当だよねー。んで、どうすんの？」

「一先ず様子見た。アレは危険すぎる。正直手に負えないのが現状だろ。それともその左腕のリベンジにでも行くか？僕は止めないぞ」

「…いや、いいよ。どうせ誰か喰えば生えてくるし。僕も終焉の意見に賛成だよ。」

「フフッ…。まあ楽しみは最後まで取っておくさ…」



「…なあ天城」

「何だ？」

「紅華は僕を背負いながらこう言った。

「…お前だけは消えないでくれ。」

振り絞ったような悲しい呟きだった。

「当たり前だろ。」

僕は背負われながら迷わずそう答えた。紅華は「そうか…」と微笑みながら小さく呟いた。

（あとがき）

初同人です。この作品を書くにあたって色々準備しました。

まずパソコンを購入しました（爆）。他にもその他必要なものを買って揃えから執筆にあたりました。

私はこの同人サークルに入るのが一番遅く…というか急遽参戦させていただいたようなものなのですが、最初何を書くのかわからずに二つ返事でOKを出してしまいました。それから話を聞いてみると…

なげと「話のジャンルはファンタジーをお願いします」

作者「…………マジで？」

実は私…ファンタジーって書いたことないんです。それ以前にまだ二作品ぐらいしか書いた経験がなく、正直出だしからピンチでした（笑）

だが、それを言い訳にしては駄目だと自分に言い聞かせ必死で書くこと一週間。無事に完成いたしました。一時はどうなることかと思っただけ…。っていうかこれファンタジーか？

この作品を執筆中に丁度西尾維新さんの『戯言シリーズ』を拝見したのでかなりネタがそれっぽくなってしまいました。ネタに至ってはやバクリの域を超えた気がしました。

最後にこの作品の構成を考えて下さった奏さん。イラストを描いてくれたなげと君。その他メンバーのみなさんありがとうございました。それではこの辺で、さようなら！